OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	TA (Teaching Assistant) の声　サイバーメディアフォーラム no.7　CALLシステム
Author(s)	
Citation	サイバーメディア・フォーラム. 2006, 7, p. 52-53
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/70234
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

CALL 授業の TA を通して学んだこと

津山　久美子　（言語文化研究科　言語文化学専攻）

4 月から 2 つの授業で TA をさせていただきした。ひとつは月曜 2 限の日野先生、もうひとつは木曜 1 限の竹蓋先生です。

竹蓋先生の授業では、まず IC(Introduction to College Life)という自習用リスニング教材を聞くことから始まります。もちろん CALL 教室であるため、学生は一人につき一台ずつパソコンがあり、ヘッドフォンを使って教材を進めていくため、他の人のことを気にせず、自分のペースで進むことができます。そして、リスニングが終了すると、「サイエンス」という教材に進み、教材内の文章を聞き、その中で使われている単語を覚えます。

この授業では CALL 教室ならではの機能が変化を与えてくれます。例えば、竹蓋先生は学生が教材に興味を持つことを重要視されています。そのため、しばしばリスニング教材で登場した人物や場所などの情報が載っているサイトを生徒に紹介されます。このように紹介することで、学生は「もっと聞きたい」「この人はどんな人なんだろう」と教材自体に興味を持ち、リスニング学習をさせられているという気持ちではなく、まるでドラマを見ているような気分で自習をしています。先日、授業が終わった後に、ある学生がこのような話をしていました。

「ユニット 3 で出てくる、あの先生、いい感じじゃない？あの、星がなんとか、って言ってた人」

彼女が、まるで自分も教材の世界の一員のように、教材を身近に感じている様子がよく分かります。

「サイエンス」での学習でも、先生は CALL 教室の機能をとても巧みに使っていらっしゃいます。「サイエンス」という教材は、理系学生向けの教材であり、内容も細菌や地震など、理科系の内容が中心です。このような教材で使用されている単語は、日常生活で使うことが少ないため、「日本語で読めば分かるような内容であっても英語で聞くと分からない」ということがしばしばあります。CALL 教室はこの穴を埋めることができます。先生はインターネットを使って、それぞれのトピックに関する視覚的な情報を提供されます。例えば、地震の震度を測る機械を説明する英文を聞いた後で、実際にこの機械を見ながらもう一度英文を聞きます。このようにすることで、より学生の理解が深まります。

このように、先生の授業では CALL 教室であることを意識することなく、ふんだんに CALL 教室の強みが生かされていました。

日野先生の授業では、先生が朝早くに起き、その日のニュースを録音し、それを聞くことからはじまります。次に、それに関するニュース記事をインターネット上で検索し、文字による理解を深めた後に、もう一度テレビのニュースを聞きます。そして、そのニュースに関する質問や意見を言い合います。

この授業で重要な点の一つは、教材が「生」であることです。日野先生は、常に「日常の英語ユーザーの一員として、彼らが行っていることと同じことをやる」ということを重視しておられるため、どうしても今日、今、話題になっているニュースを教材として使用する必要があります。ここで CALL 教室の機能が生かされてきます。CALL 教室では、一人に一台パソコンがあるため、さまざまな国のニュースサイトにアクセスすることができます。

同じニュースでも、各国・各局によって、取り扱い方が異なっていたり、焦点が違っていたりする場合もあり、まさに批判的な視点から物事を判断する力を身に付ける良い機会だと感じます。

もちろん、ニュース記事も教材用として書かれてある訳ではなく「生」であるため、時々、先生が授

業前に確認したニュースが、新しいものに更新されているときなどもあります。こんなときは、より一層、自分が単に英語の勉強をしている訳ではなく、英語使用者の世界で生活しているんだ、という気持ちになれます。

日野先生の授業で使用するニュースは、おそらく学生にとってはとても難解なものです。そのため、テレビやニュース記事を読んでも、100%理解できている生徒はあまりいないと思います。それにも関わらず、その後の質疑応答ができるのは、日野先生の質問の仕方に関係します。日野先生は、学生に質問するときに、できるだけ簡単な表現を使って質問されます。学生が理解できていなかったら、何度でも別の言葉に言い換えて質問を繰り返してくださります。その先生の質問を通して、学生はニュース内容の理解を深めているように感じます。先生の質問は、生徒とニュースとの「橋渡し」の役目を果たしているのです。

お二人の先生は共に、CALL 教室の出席機能を使わず、口頭で出席を取られます。これは、学生との心的な距離を縮めるだけでなく、その日の学生の調子を確認できます。CALL 教室の機能を使えば、一瞬で出席を取れてしまうのですが、授業が「教師と学生」で成り立っていることを考えると、この出席を取る時間は、とても大切な時間だと思います。

CALL 教室での授業の TA をさせていただくことにより、「CALL の機能に頼る」のではなく、「CALL を生かす」ことの大切さを実感しました。CALL の機能は常に変わりませんが、CALL が機能以上の力を発揮できているのは、それを使用する先生方のお力だと感じます。

貴重な経験をさせていただき、ありがとうございました。